

# 結果の概要

## 1 発育状態

### (1) 身長

- ① 平成27年度の男子の身長の平均値は、5歳、10歳、14歳及び17歳を除く各年齢で前年度の同年齢より低くなっている。女子の身長は、5歳、8歳、13歳及び14歳を除く各年齢で前年度の同年齢より低くなっている。
- ② 平成27年度の身長を親の世代（30年前の昭和60年度の数值。）と比較すると、男子は5歳、6歳及び8歳を除く各年齢で、女子は5歳から7歳及び15歳を除く各年齢で親の世代より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は12歳で2.1cm、女子は10歳で1.3cm親の世代より高くなっている。
- ③ 平成27年度の身長を全国平均値と比較すると、男子は12歳及び16歳を除く各年齢で、女子は6歳を除く各年齢で全国平均値より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は14歳で0.7cm、女子は14歳で0.8cm全国平均値より高くなっている。

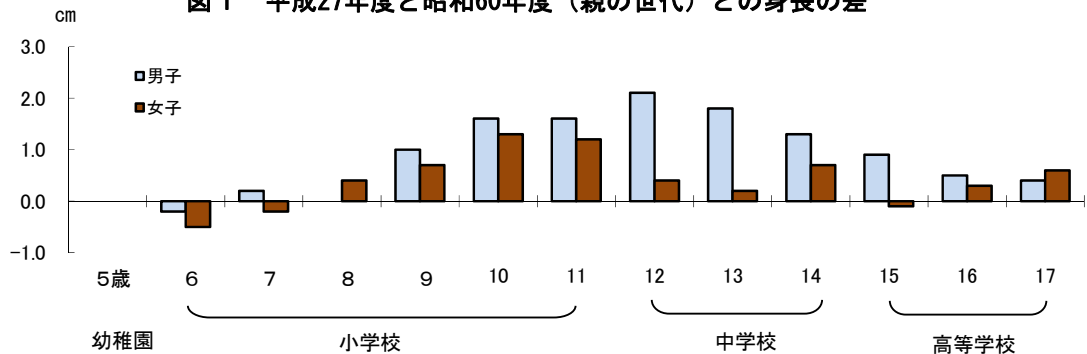
（表1、図1、統計表第1表、第2-1表、第2-2表）

表1 年齢別身長の平均値

(単位:cm)

区分	男 子							女 子							
	平成27年度 A	平成26年度 B	差 A-B	昭和60年度 (親の世代) C	差 A-C	平成27年度 全国 D	差 A-D	平成27年度 E	平成26年度 F	差 E-F	昭和60年度 (親の世代) G	差 E-G	平成27年度 全国 H	差 E-H	
幼稚園	5歳	110.8	110.5	0.3	110.8	0.0	110.4	0.4	109.8	109.7	0.1	109.8	0.0	109.4	0.4
小学校	6歳	116.7	117.0	△0.3	116.9	△0.2	116.5	0.2	115.4	115.7	△0.3	115.9	△0.5	115.5	△0.1
	7歳	122.9	123.0	△0.1	122.7	0.2	122.5	0.4	121.7	121.8	△0.1	121.9	△0.2	121.5	0.2
	8歳	128.2	128.4	△0.2	128.2	0.0	128.1	0.1	127.6	127.6	0.0	127.2	0.4	127.3	0.3
	9歳	133.9	134.0	△0.1	132.9	1.0	133.5	0.4	133.6	134.0	△0.4	132.9	0.7	133.4	0.2
	10歳	139.5	139.2	0.3	137.9	1.6	138.9	0.6	140.6	140.7	△0.1	139.3	1.3	140.1	0.5
中学校	11歳	145.6	145.8	△0.2	144.0	1.6	145.2	0.4	147.1	147.5	△0.4	145.9	1.2	146.7	0.4
	12歳	152.4	153.1	△0.7	150.3	2.1	152.6	△0.2	152.0	152.1	△0.1	151.6	0.4	151.8	0.2
	13歳	160.2	160.3	△0.1	158.4	1.8	159.8	0.4	155.2	154.9	0.3	155.0	0.2	154.9	0.3
高等学校	14歳	165.8	165.1	0.7	164.5	1.3	165.1	0.7	157.3	157.1	0.2	156.6	0.7	156.5	0.8
	15歳	168.9	169.0	△0.1	168.0	0.9	168.3	0.6	157.4	157.8	△0.4	157.5	△0.1	157.1	0.3
	16歳	169.8	170.5	△0.7	169.3	0.5	169.8	0.0	158.0	158.6	△0.6	157.7	0.3	157.6	0.4
	17歳	171.0	170.9	0.1	170.6	0.4	170.7	0.3	158.5	158.6	△0.1	157.9	0.6	157.9	0.6

図1 平成27年度と昭和60年度（親の世代）との身長の差



注) 身長の差は、都の平成27年度平均値から昭和60年度（親の世代）平均値を引いたものである。

④ 平成9年度生まれ（平成27年度17歳）の年間発育量をみると、男子は11歳時に最大の発育量を示しており、女子は10歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢時は、女子が男子に比べ1歳早くなっている。

また、この発育量を親の世代（昭和60年度17歳）と比較すると、男子では親の世代が最大の発育量を示すのは11歳時であり、平成9年度生まれは親の世代と同じ年齢時に最大の発育量を示している。また、5歳から8歳、10歳から12歳及び15歳の各歳時で親の世代を上回っている。女子では親の世代が最大の発育量を示すのは10歳時であり、平成9年度生まれは親の世代と同じ年齢時に最大の発育量を示している。また、5歳、6歳、8歳及び15歳の各歳時で親の世代を上回っている。

（表2、図2、統計表第1表、第2-1表、第2-2表）

表2 平成9年度生まれと昭和42年度生まれの年間発育量の比較（身長）

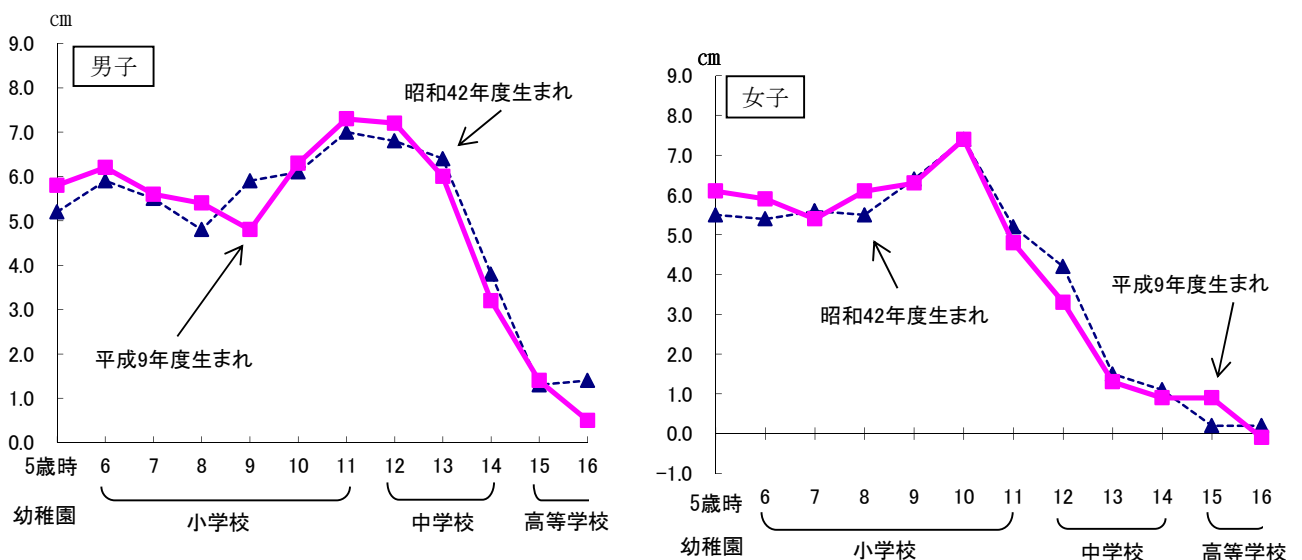
（単位：cm）

区分	男子		女子	
	平成9年度生まれ (平成27年度17歳)	昭和42年度生まれ (親の世代の昭和60年度17歳)	平成9年度生まれ (平成27年度17歳)	昭和42年度生まれ (親の世代の昭和60年度17歳)
幼稚園 5歳時	5.8	5.2	6.1	5.5
小学校	6歳時	6.2	5.9	5.4
	7歳時	5.6	5.5	5.4
	8歳時	5.4	4.8	6.1
	9歳時	4.8	5.9	6.3
	10歳時	6.3	6.1	7.4
	11歳時	7.3	7.0	4.8
中学校	12歳時	7.2	6.8	3.3
	13歳時	6.0	6.4	1.3
	14歳時	3.2	3.8	0.9
高等学校	15歳時	1.4	1.3	0.9
	16歳時	0.5	1.4	△0.1
総発育量	59.7	60.1	48.3	48.2

注1) 年間発育量とは、例えば、平成9年度生まれ(平成27年度17歳)の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成16年度調査6歳の者の身長から平成15年度調査5歳の者の身長を引いた数値である。なお、標本調査のため各歳時の調査対象者は異なる。

2) 網掛けの数値は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図2 平成9年度生まれと昭和42年度生まれの年間発育量の比較（身長）



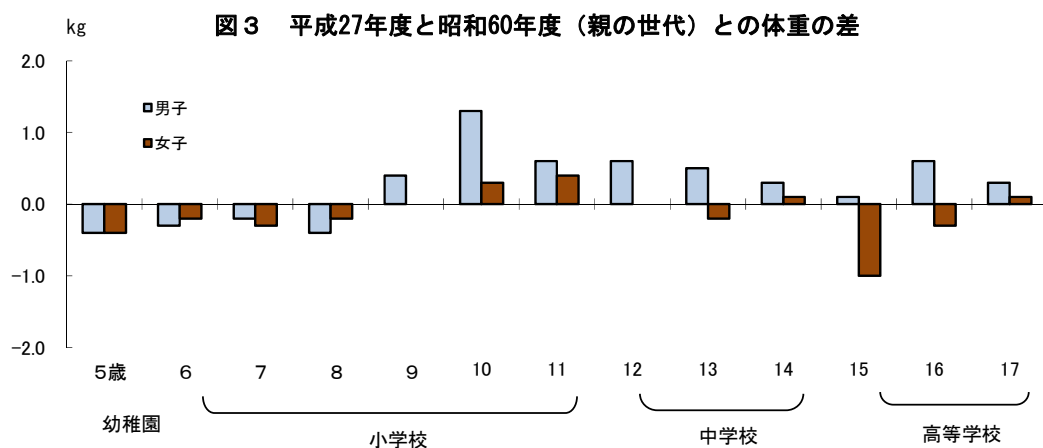
## (2) 体 重

- ① 平成 27 年度の男子の体重の平均値は、5 歳、14 歳から 17 歳を除く各年齢で前年度の同年齢より軽くなっている。女子の体重は、8 歳、13 歳及び 15 歳から 17 歳を除く各年齢で前年度の同年齢より軽くなっている。
- ② 平成 27 年度の体重を親の世代（30 年前の昭和 60 年度の数値。）と比較すると、男子は 9 歳から 17 歳の各年齢で親の世代より重くなっており、女子は 9 歳から 12 歳、14 歳及び 17 歳を除く各年齢で親の世代より軽くなっている。最も差がある年齢は、男子は 10 歳で 1.3kg 親の世代より重く、女子は 15 歳で 1.0kg 親の世代より軽くなっている。
- ③ 平成 27 年度の体重を全国平均値と比較すると、男子は 5 歳、7 歳、10 歳、11 歳及び 14 歳から 16 歳を除く各年齢で、女子は 14 歳を除く各年齢で全国平均値より軽くなっている。最も差がある年齢は、男子は 12 歳で 0.8kg 全国平均値より軽く、女子は 15 歳で 0.4kg 全国平均値より軽くなっている。

(表 3、図 3、統計表第 1 表、第 3-1 表、第 3-2 表)

表 3 年齢別体重の平均値

		男 子						女 子							
区 分	年 齢	平成 27 年度	平成 26 年度	差 A-B	昭和 60 年度 (親の世代)	差 A-C	平成 27 年度 全国	差 A-D	平成 27 年度	平成 26 年度	差 E-F	昭和 60 年度 (親の世代)	差 E-G	平成 27 年度 全国	差 E-H
		A	B		D		E		F	G		H			
幼稚園	5 歳	18.9	18.8	0.1	19.3	△ 0.4	18.9	0.0	18.4	18.6	△ 0.2	18.8	△ 0.4	18.5	△ 0.1
	6 歳	21.1	21.6	△ 0.5	21.4	△ 0.3	21.3	△ 0.2	20.7	20.8	△ 0.1	20.9	△ 0.2	20.8	△ 0.1
小学校	7 歳	24.0	24.2	△ 0.2	24.2	△ 0.2	23.9	0.1	23.1	23.2	△ 0.1	23.4	△ 0.3	23.4	△ 0.3
	8 歳	26.5	27.0	△ 0.5	26.9	△ 0.4	26.9	△ 0.4	26.2	26.2	0.0	26.4	△ 0.2	26.4	△ 0.2
	9 歳	30.1	30.4	△ 0.3	29.7	0.4	30.4	△ 0.3	29.5	30.1	△ 0.6	29.5	0.0	29.7	△ 0.2
	10 歳	34.0	34.1	△ 0.1	32.7	1.3	34.0	0.0	33.7	34.1	△ 0.4	33.4	0.3	33.9	△ 0.2
	11 歳	38.4	38.9	△ 0.5	37.8	0.6	38.2	0.2	38.6	39.3	△ 0.7	38.2	0.4	38.8	△ 0.2
中学校	12 歳	43.1	44.1	△ 1.0	42.5	0.6	43.9	△ 0.8	43.3	43.4	△ 0.1	43.3	0.0	43.6	△ 0.3
	13 歳	48.7	48.9	△ 0.2	48.2	0.5	48.8	△ 0.1	47.2	46.9	0.3	47.4	△ 0.2	47.3	△ 0.1
	14 歳	54.5	54.0	0.5	54.2	0.3	53.9	0.6	49.9	50.1	△ 0.2	49.8	0.1	49.9	0.0
高等学校	15 歳	59.3	58.7	0.6	59.2	0.1	59.0	0.3	51.1	51.0	0.1	52.1	△ 1.0	51.5	△ 0.4
	16 歳	61.1	60.7	0.4	60.5	0.6	60.6	0.5	52.4	52.4	0.0	52.7	△ 0.3	52.6	△ 0.2
	17 歳	62.2	62.2	0.0	61.9	0.3	62.5	△ 0.3	52.9	52.3	0.6	52.8	0.1	53.0	△ 0.1



注) 体重の差は、都の平成 27 年度平均値から昭和 60 年度（親の世代）平均値を引いたものである。

④ 平成9年度生まれ（平成27年度17歳）の年間発育量をみると、男子は13歳時に最大の発育量を示しており、女子は10歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢時は、女子が男子に比べ3歳早くなっている。

また、この発育量を親の世代（昭和60年度17歳）と比較すると、男子では親の世代が最大の発育量を示すのは13歳時であり、平成9年度生まれは親の世代と同じ年齢時に最大の発育量を示している。また、5歳から8歳、12歳、15歳及び16歳の各歳時で親の世代を上回っている。女子では親の世代が最大の発育量を示すのは11歳時であり、平成9年度生まれは親の世代より1歳早く最大の発育量を示している。また、5歳、6歳、8歳、10歳、13歳及び16歳の各歳時で親の世代を上回っている。

（表4、図4、統計表第1表、第3-1表、第3-2表）

表4 平成9年度生まれと昭和42年度生まれの年間発育量の比較（体重）

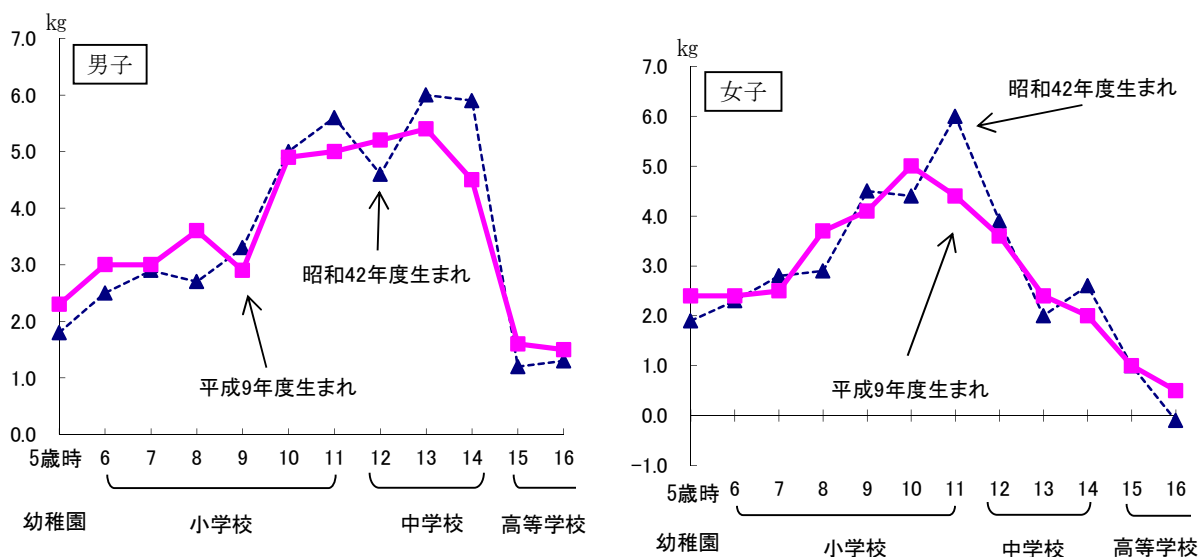
（単位:kg）

区分	男子		女子	
	平成9年度生まれ (平成27年度17歳)	昭和42年度生まれ (親の世代の昭和60年度17歳)	平成9年度生まれ (平成27年度17歳)	昭和42年度生まれ (親の世代の昭和60年度17歳)
幼稚園	5歳時	2.3	2.4	1.9
	6歳時	3.0	2.5	2.3
小学校	7歳時	3.0	2.9	2.8
	8歳時	3.6	2.7	3.7
	9歳時	2.9	3.3	4.1
	10歳時	4.9	5.0	5.0
	11歳時	5.0	5.6	4.4
中学校	12歳時	5.2	4.6	3.6
	13歳時	5.4	6.0	2.4
	14歳時	4.5	5.9	2.0
高等学校	15歳時	1.6	1.2	1.0
	16歳時	1.5	1.3	0.5
総発育量	42.9	42.8	34.0	34.2

注1) 年間発育量とは、例えば、平成9年度生まれ(平成27年度17歳)の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成16年度調査6歳の者の体重から平成15年度調査5歳の者の体重を引いた数値である。なお、標本調査のため各歳時の調査対象者は異なる。

2) 網掛けの数値は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図4 平成9年度生まれと昭和42年度生まれの年間発育量の比較（体重）



### (3) 座高

- ① 平成 27 年度の男子の座高の平均値は、13 歳から 15 歳及び 17 歳の各年齢で前年度の同年齢より高くなっている。女子の座高は、8 歳、13 歳及び 17 歳の各年齢で前年度の同年齢より高くなっている。
- ② 平成 27 年度の座高を親の世代（30 年前の昭和 60 年度の数値。）と比較すると、男女とも 5 歳から 8 歳の各年齢で親の世代より低くなっており、9 歳から 17 歳の各年齢で親の世代より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は 15 歳及び 17 歳で 1.6cm 親の世代より高く、女子は 5 歳で 1.0cm 親の世代より低くなっている。
- ③ 平成 27 年度の座高を全国平均値と比較すると、男子は 5 歳、6 歳、8 歳及び 12 歳を除く各年齢で、女子は 8 歳、9 歳、11 歳、14 歳、16 歳及び 17 歳の各年齢で全国平均値より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は 15 歳で 0.4cm、女子は 17 歳で 0.3cm 全国平均値より高くなっている。

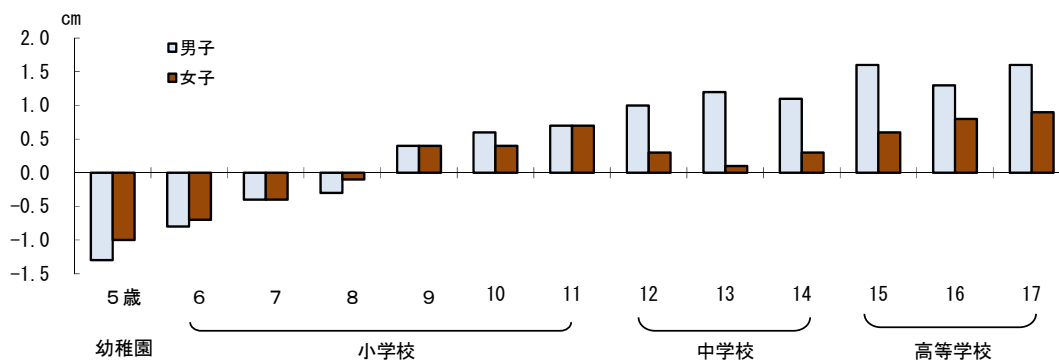
（表 5、図 5、統計表第 1 表、第 4-1 表、第 4-2 表）

表 5 年齢別座高の平均値

(単位:cm)

区分	年齢	男 子						女 子							
		平成 27年度 A	平成 26年度 B	差 A-B	昭和60年度 (親の世代) C	差 A-C	平成27年度 全国 D	差 A-D	平成 27年度 E	平成 26年度 F	差 E-F	昭和60年度 (親の世代) G	差 E-G	平成27年度 全国 H	差 E-H
幼稚園	5歳	61.6	61.7	△ 0.1	62.9	△ 1.3	61.8	△ 0.2	61.2	61.2	0.0	62.2	△ 1.0	61.3	△ 0.1
	6歳	64.8	64.9	△ 0.1	65.6	△ 0.8	64.8	0.0	64.2	64.4	△ 0.2	64.9	△ 0.7	64.4	△ 0.2
小学校	7歳	67.7	67.8	△ 0.1	68.1	△ 0.4	67.6	0.1	67.2	67.2	0.0	67.6	△ 0.4	67.2	0.0
	8歳	70.2	70.3	△ 0.1	70.5	△ 0.3	70.2	0.0	70.0	69.9	0.1	70.1	△ 0.1	69.9	0.1
	9歳	72.8	72.8	0.0	72.4	0.4	72.6	0.2	72.8	72.8	0.0	72.4	0.4	72.7	0.1
	10歳	75.1	75.1	0.0	74.5	0.6	74.9	0.2	75.8	76.0	△ 0.2	75.4	0.4	75.8	0.0
	11歳	77.8	78.0	△ 0.2	77.1	0.7	77.7	0.1	79.4	79.5	△ 0.1	78.7	0.7	79.2	0.2
中学校	12歳	81.1	81.4	△ 0.3	80.1	1.0	81.4	△ 0.3	82.1	82.2	△ 0.1	81.8	0.3	82.1	0.0
	13歳	85.2	85.1	0.1	84.0	1.2	85.1	0.1	83.8	83.7	0.1	83.7	0.1	83.9	△ 0.1
	14歳	88.5	88.2	0.3	87.4	1.1	88.2	0.3	85.0	85.2	△ 0.2	84.7	0.3	84.9	0.1
高等学校	15歳	90.8	90.6	0.2	89.2	1.6	90.4	0.4	85.5	85.5	0.0	84.9	0.6	85.5	0.0
	16歳	91.5	91.5	0.0	90.2	1.3	91.4	0.1	85.9	86.0	△ 0.1	85.1	0.8	85.7	0.2
	17歳	92.4	91.9	0.5	90.8	1.6	92.1	0.3	86.2	86.1	0.1	85.3	0.9	85.9	0.3

図 5 平成27年度と昭和60年度（親の世代）との座高の差



注) 座高の差は、都の平成 27 年度平均値から昭和 60 年度（親の世代）平均値を引いたものである。

## 2 健康状態

### (1) 疾病・異常の被患率等の状況

学校種別に疾病・異常の被患率等をみると、すべての学校種において「むし歯（う歯）」のある者の割合が高く、小学校、中学校及び高等学校においては30%を超えている。また、「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、小学校において30%を、中学校において50%を超えており、「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、小学校及び中学校において10%を超えている。

（表6、統計表第5-1表）

表6 学校種別疾病・異常の被患率等

区分(%)	幼稚園(5歳)	小学校(6~11歳)	中学校(12~14歳)	高等学校(15~17歳)	
90以上					
80以上~90未満					
70~80					
60~70					
50~60			裸眼視力1.0未満 57.6		
40~50		むし歯(う歯) 44.7		むし歯(う歯) 49.2	
30~40		裸眼視力1.0未満 34.3	むし歯(う歯) 37.1		
20~30	むし歯(う歯) 28.5				
10~20		鼻・副鼻腔疾患 12.6	鼻・副鼻腔疾患 15.2		
1~10	8~10				
	6~8		耳疾患 7.0 眼の疾病・異常 6.7 歯・口腔のその他の疾病・異常 6.1	歯垢の状態 7.3 鼻・副鼻腔疾患 7.0	
	4~6	歯列・咬合 5.2	アトピー性皮膚炎 4.4 歯列・咬合 4.3 ぜん息 4.3	眼の疾病・異常 5.9 耳疾患 5.3 歯垢の状態 5.0 歯肉の状態 4.6 ぜん息 4.6 歯列・咬合 4.3 アトピー性皮膚炎 4.1	歯列・咬合 5.8 歯肉の状態 5.4
	2~4	鼻・副鼻腔疾患 2.6 ぜん息 2.6 アトピー性皮膚炎 2.1 歯垢の状態 2.0	歯垢の状態 2.8	蛋白検出の者 3.0 歯・口腔のその他の疾病・異常 2.9 心電図異常 2.3	眼の疾病・異常 3.6 蛋白検出の者 3.2 心電図異常 3.0 耳疾患 2.9 ぜん息 2.4 アトピー性皮膚炎 2.2
	1~2	耳疾患 1.7 その他の皮膚疾患 1.5 歯・口腔のその他の疾病・異常 1.4 眼の疾病・異常 1.3 口腔咽喉頭疾患・異常 1.2	心電図異常 1.5 栄養状態 1.4 歯肉の状態 1.3	せき柱・胸郭 1.5 栄養状態 1.2	栄養状態 1.4 顎関節 1.3 せき柱・胸郭 1.2
	0.5~1	心臓の疾病・異常 0.6 蛋白検出の者 0.6	その他の皮膚疾患 0.7 蛋白検出の者 0.7 心臓の疾病・異常 0.6 せき柱・胸郭 0.5	心臓の疾病・異常 0.8	歯・口腔のその他の疾病・異常 0.7 心臓の疾病・異常 0.5
0.1~1	0.1~0.5	歯肉の状態 0.3 言語障害 0.3 せき柱・胸郭 0.1 腎臓疾患 0.1	難聴 0.4 口腔咽喉頭疾患・異常 0.3 言語障害 0.3 腎臓疾患 0.2 尿糖検出の者 0.1 寄生虫卵保有者 0.1	口腔咽喉頭疾患・異常 0.4 難聴 0.3 顎関節 0.2 その他の皮膚疾患 0.2 尿糖検出の者 0.2 腎臓疾患 0.2	難聴 0.3 尿糖検出の者 0.3 口腔咽喉頭疾患・異常 0.2 その他の皮膚疾患 0.2 腎臓疾患 0.2
	0.1未満	顎関節 0.0	顎関節 0.0 結核 0.0	言語障害 0.0	結核 0.0 言語障害 0.0

注1) 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、扁桃肥大、咽頭炎、喉頭炎、扁桃炎、音声言語異常のある者等である。

2) 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、唾石、癒合歯、要注意乳歯等のある者等である。

3) 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。

4) 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

5) 「蛋白検出の者」とは、尿検査のうち、蛋白第1次検査の結果、尿中に蛋白が検出(陽性(+)以上)又は擬陽性(±)と判定された者である。

6) 「尿糖検出の者」とは、尿検査のうち、糖第1次検査の結果、尿中に糖が検出(陽性(+)以上)と判定された者である。

7) 難聴については、6歳から8歳、10歳、12歳、14歳、15歳及び17歳、結核については、6歳から15歳、心電図異常については、6歳、12歳及び15歳、尿糖検出の者については、6歳から17歳、寄生虫卵保有者については、5歳から8歳のみ実施している。

8) 幼稚園(5歳)及び高等学校の「裸眼視力1.0未満」については、疾病・異常被患率等が100.0%、疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人(5歳は50人)未満又は回答校が1校以下のため統計数値を公表しない。

(2) 主な疾病・異常の被患率

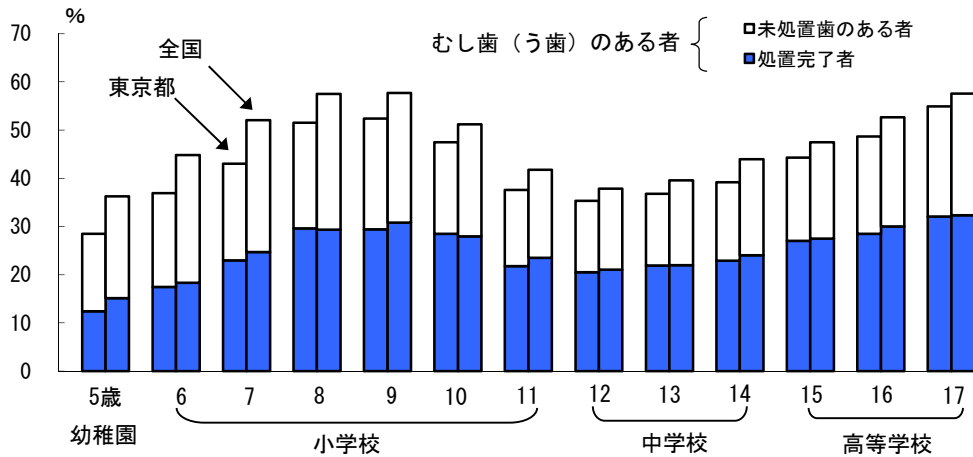
① むし歯（う歯）

ア 年齢別に「むし歯（う歯）」のある者の割合をみると、5歳から9歳は年齢とともに上昇し、10歳から12歳は低下している。その後、13歳以降は上昇している。「むし歯（う歯）」のある者の割合が最も高い年齢は、17歳で55.0%となっている。また、「処置完了者」の割合は、5歳及び6歳を除く各年齢で「未処置歯のある者」の割合を上回っている。

イ 全国値と比較すると、すべての年齢で「むし歯（う歯）」のある者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、7歳で9.0ポイント全国値より低くなっている。

(図6、統計表第5-1表、参考表)

図6 むし歯(う歯)のある者の割合の比較



- 注1) むし歯（う歯）のある者＝処置完了者＋未処置歯のある者
- 注2) 10歳から12歳において割合が減少するのは、乳歯が生え替わることが影響していると考えられる。

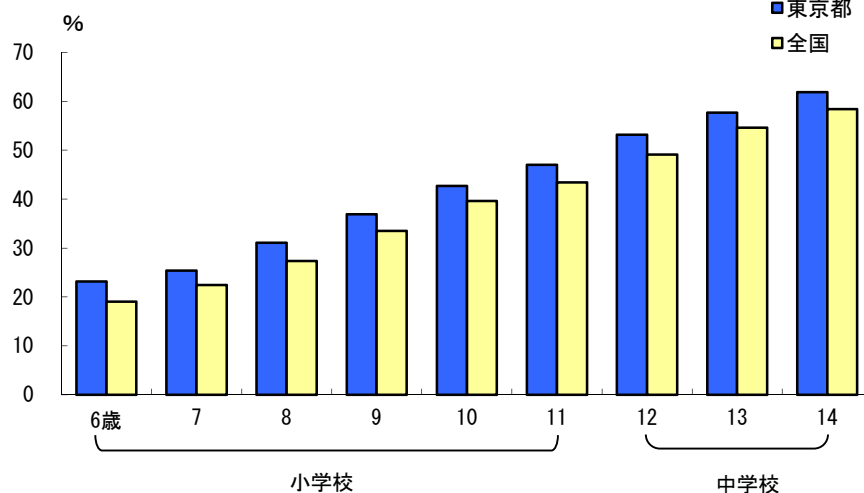
② 裸眼視力

ア 年齢別に「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合をみると、6歳から14歳で年齢とともに上昇している。「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合が最も高い年齢は、14歳で61.9%となっている。

イ 全国値と比較すると、すべての年齢で「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、6歳で4.2ポイント全国値より高くなっている。

(図7、統計表第5-1表、参考表)

図7 裸眼視力1.0未満の者の割合の比較



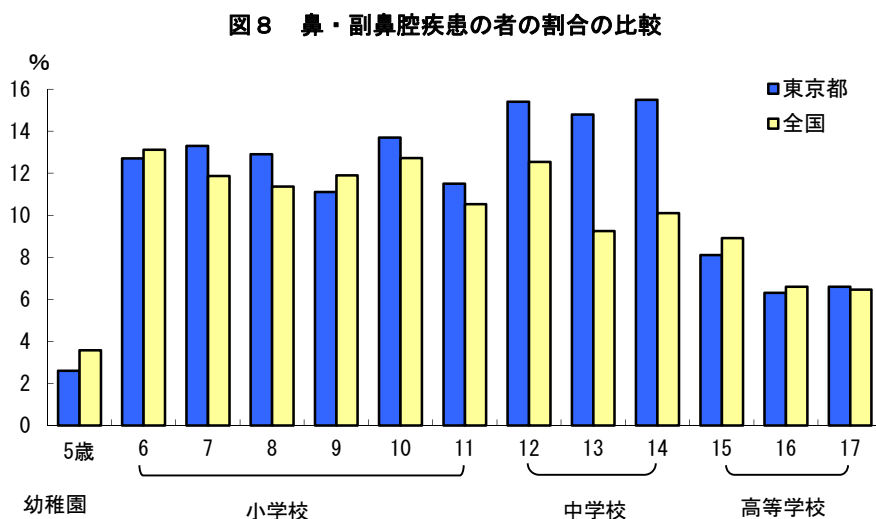
注) 幼稚園（5歳）及び高等学校の「裸眼視力 1.0 未満」については、疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人（5歳は50人）未満又は回答校が1校以下又は疾病・異常被患率が100.0%のため統計数値を公表しない。

### ③ 鼻・副鼻腔疾患

ア 年齢別に「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合をみると、6歳から14歳の各年齢で10%を超えている。「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合が最も高い年齢は、14歳で15.5%となっている。

イ 全国値と比較すると、5歳、6歳、9歳、15歳及び16歳を除く各年齢で「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、13歳で5.6ポイント全国値より高くなっている。

(図8、統計表第5-1表、参考表)

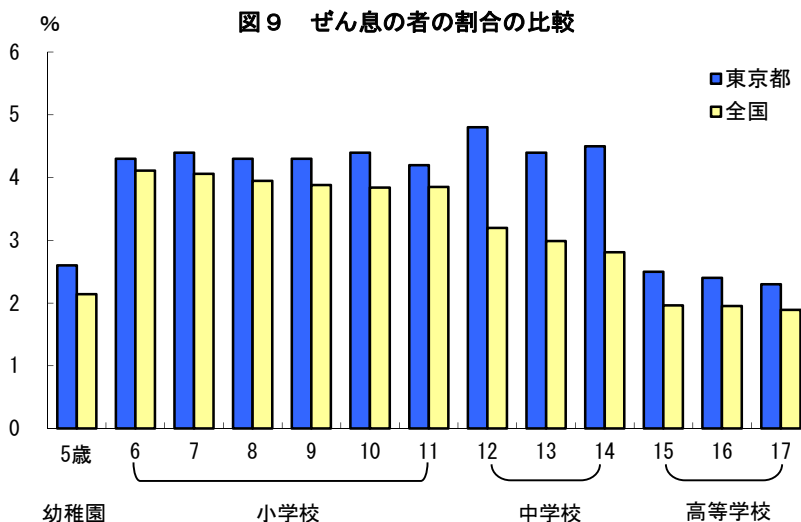


### ④ ぜん息

ア 年齢別に「ぜん息」の者の割合をみると、6歳から14歳の各年齢で4%を超えている。「ぜん息」の者の割合が最も高い年齢は、12歳で4.8%となっている。

イ 全国値と比較すると、全ての年齢で「ぜん息」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、14歳で1.7ポイント全国値より高くなっている。

(図9、統計表第5-1表、参考表)





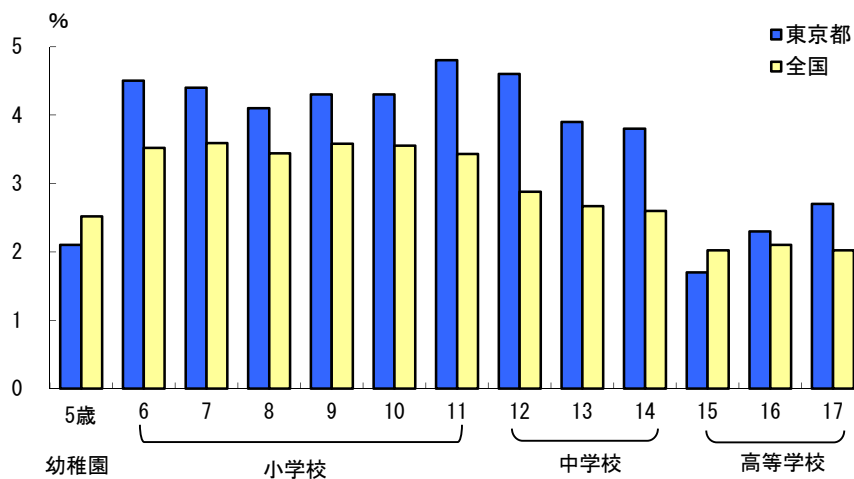
### ⑤ アトピー性皮膚炎

ア 年齢別に「アトピー性皮膚炎」の者の割合をみると、6歳から14歳の各年齢で3%を超えている。「アトピー性皮膚炎」の者の割合が最も高い年齢は、11歳で4.8%となっている。

イ 全国値と比較すると5歳及び15歳を除く各年齢で「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、12歳で1.7ポイント全国値より高くなっている。

(図10、統計表第5-1表、参考表)

図10 アトピー性皮膚炎の者の割合の比較

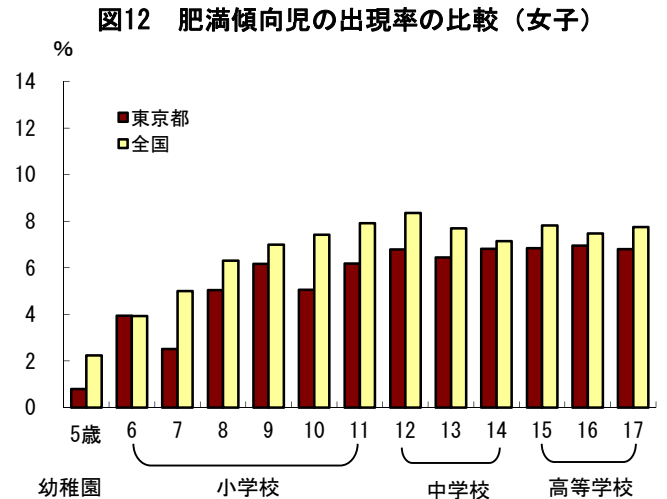
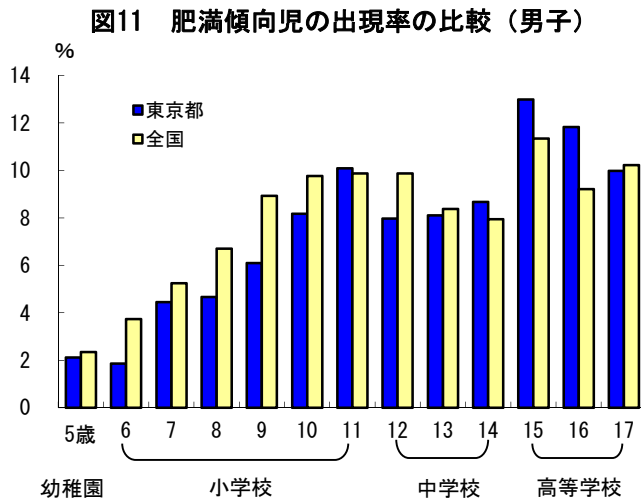


### 3 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

#### (1) 肥満傾向児の出現率

- ① 年齢別に肥満傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は15歳で12.99%、女子は16歳で6.96%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は11歳及び14歳から16歳を除く各年齢で、女子は6歳を除く各年齢で全国値より低くなっている。

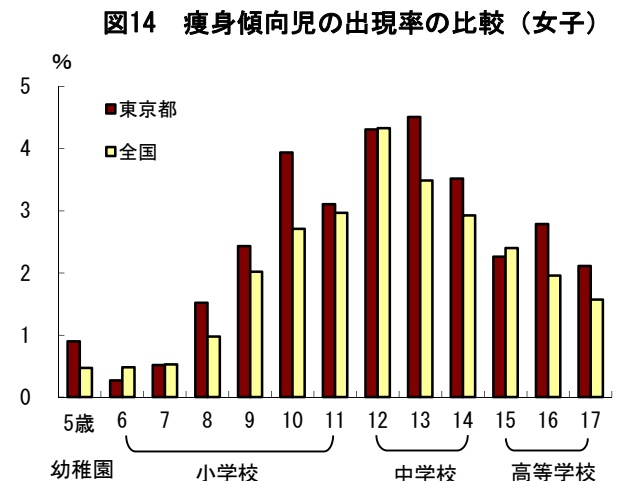
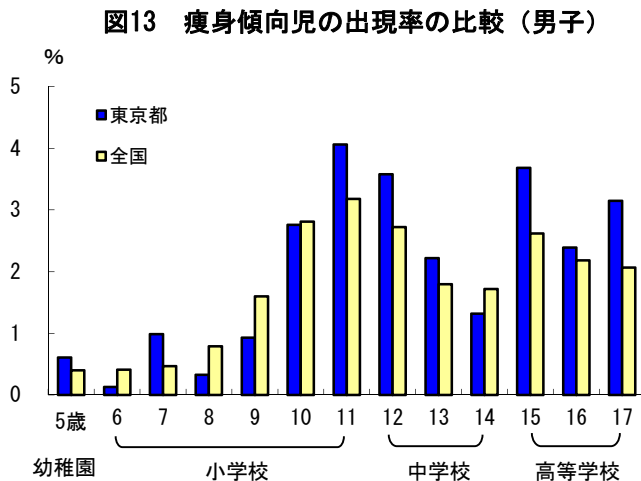
(図11、12、統計表第6表)



#### (2) 痩身傾向児の出現率

- ① 年齢別に痩身傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は11歳で4.06%、女子は13歳で4.51%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は5歳、7歳、11歳から13歳及び15歳から17歳の各年齢で、女子は6歳、7歳、12歳及び15歳を除く各年齢で全国値より高くなっている。

(図13、14、統計表第7表)



[肥満・痩身傾向児の算出方法について]

性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を算出し、肥満度が20%以上の者を肥満傾向児、-20%以下の者を痩身傾向児としている。

算式は以下のとおりである。

$$\text{肥満度} = [\text{実測体重(kg)} - \text{身長別標準体重(kg)}] / \text{身長別標準体重(kg)} \times 100 (\%)$$

※ 身長別標準体重の求め方

$$\text{身長別標準体重(kg)} = a \times \text{実測身長(cm)} - b$$

年齢	係数	男子		女子	
		a	b	a	b
5歳		0.386	23.699	0.377	22.750
6歳		0.461	32.382	0.458	32.079
7歳		0.513	38.878	0.508	38.367
8歳		0.592	48.804	0.561	45.006
9歳		0.687	61.390	0.652	56.992
10歳		0.752	70.461	0.730	68.091
11歳		0.782	75.106	0.803	78.846
12歳		0.783	75.642	0.796	76.934
13歳		0.815	81.348	0.655	54.234
14歳		0.832	83.695	0.594	43.264
15歳		0.766	70.989	0.560	37.002
16歳		0.656	51.822	0.578	39.057
17歳		0.672	53.642	0.598	42.339

出典:財団法人日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル(改訂版)」平成18年